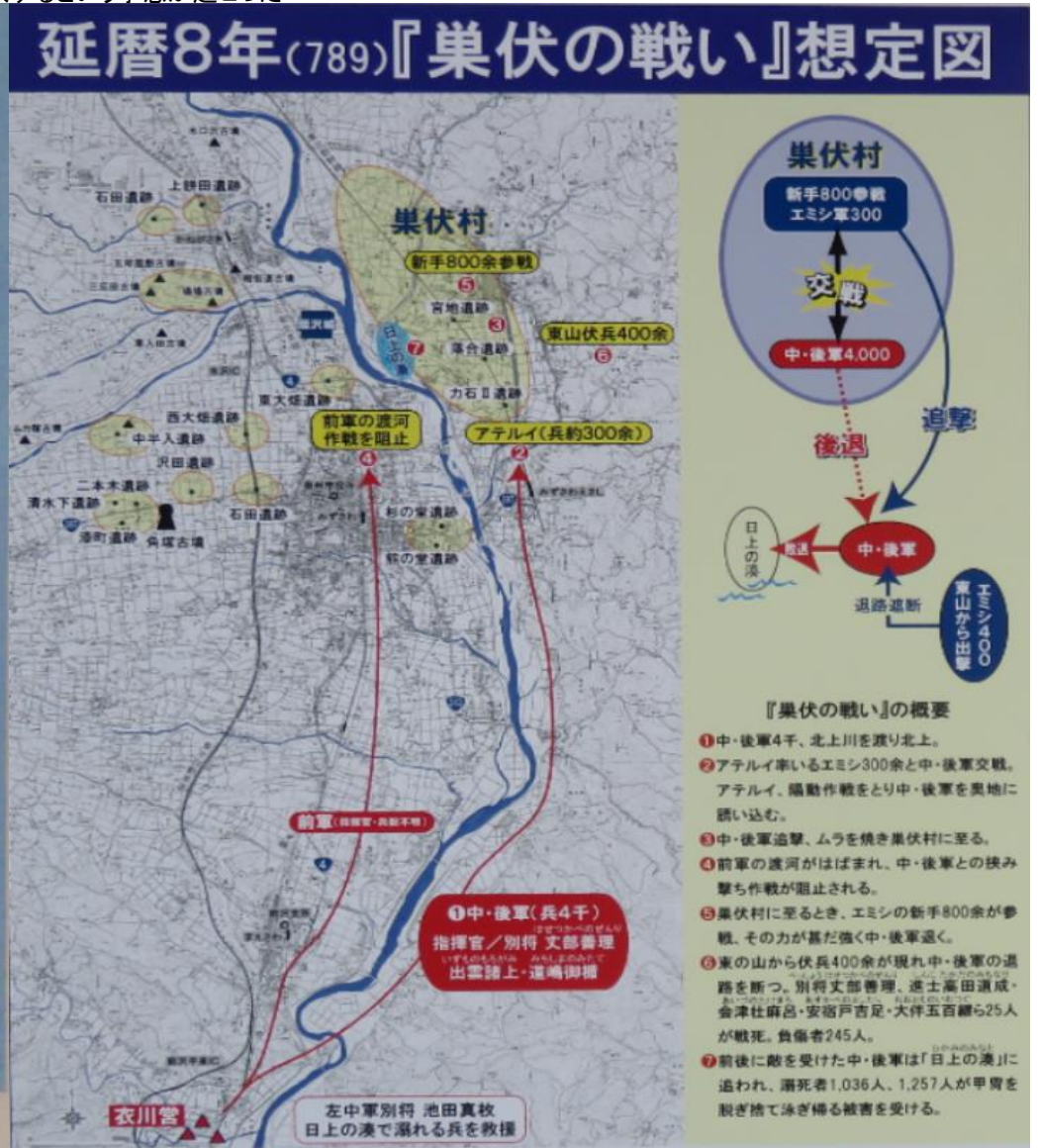


# 巢伏古戦場跡(岩手県奥州市)

左は「古代の戦いと城柵位置図」/右は「巢伏(すぶし)の戦い」の想定図/延暦8年(789年)、巢伏村(現水沢市辺り)で、征東将軍紀古佐美(きのこさみ)率いる朝廷軍と阿弓流為(アテルイ)率いるエミシ(蝦夷)軍が戦い、朝廷軍が大敗するという事態が起こった



戦場の拡大図/周辺の遺跡は古代のエミシの拠点であったとされる/角塚古墳や中半入遺跡もエミシとの関連が想定されるようだ



前方に物見櫓が建っている/このエリアが「巢伏の戦い」があった巢伏古戦場跡/右手に北上川が流れている



近づいて見たところ/巢伏古戦場跡公園となっている

[\(クリックしてビデオを見る\)](#)



石碑が立っていた/こちらは「巢伏の戦い跡」と記されている



こちらは「蝦夷の群像」とある



アップで見たところ

# 胆 沢 の 合 戦

原画・中一弥

(河北新報社 提供)



蝦夷の

群像

「胆沢」は、「源日本紀」五十七(七七)「陸奥軍三千人を發し、胆沢の賊を伐つて、初めて登場する。その後、延暦二十二年に胆沢城がつけられる平安時代初期の古史東北史の歴史舞台となった。胆沢の歴史は、国家支配の拡大と歴史の流転にのみならず、蝦夷の歴史の流転でもあった。

宮城県栗原の蝦夷出身の郡司、伊治麻呂の乱(延暦十一年)で伊治城(陸奥多賀城)が焼き落とされ、九年後の延暦十三年、記古佐美の平定を期して、三浦麻呂(母麻呂)が「胆沢」に「果敢の戦い」がおこなわれている。

そして、延暦十三年と二十年の二度にわたって、坂上田村麻呂とアテルイの「胆沢の戦い」が胆沢地方を古代国家の支配に組み込まれた。この延暦二十二年、アテルイをはじめ多賀城を襲ったアテルイの部族は、胆沢の肥田を大地で平定させようとした。アテルイとモロは、河内国福山(大阪府)で処刑された。

胆沢の未来を願ったアテルイとモロは、「蝦夷の群像」を千年の歴史のなかで描いてきた北上川(阿武隈川)に、彼らが願った未来を、私たちが築いていかなければならぬ。

上を見上げると物見台





物見台の上で巢伏古戦場跡を見たところ/ここでは「田んぼアート」と呼ばれる催しが行われるそうだが、その名残も見える



その左手/こんな所で壮絶な戦いが繰り広げられたのであろうか



その更に左手/この戦いの後、アテルイはエミシ軍のリーダーとして13年間も朝廷軍と対峙していくが、延暦21年(802年)征夷大將軍坂上田村麻呂に降伏し、河内国杜山で処刑された/この地の歴史は国家支配の拡大という歴史の流れに飲み込まれていくエミシ社会を映し出す歴史でもあった  
[\(クリックしてビデオを見る\)](#)



参考ホームページ

<http://aterui8.jp/area/isawa2.html>

<http://rover.seesaa.net/article/424280615.html>

<http://www7b.biglobe.ne.jp/~kiku-uj/na1/iw/iw24.html>

<http://www.t-aterui.jp/iwate/i-inasenowatari8A.html>

